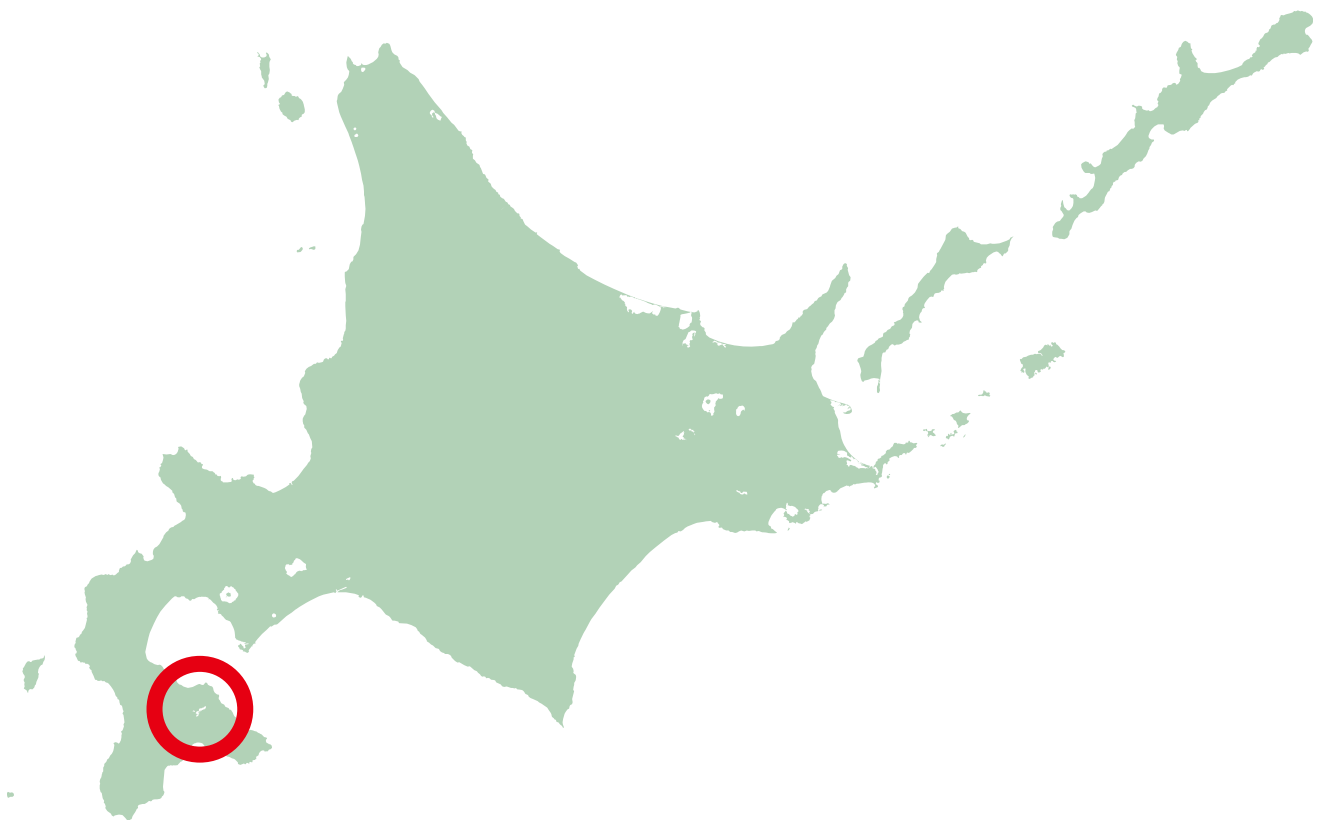




あなたにぴったりの湿地は

大沼



こんなところ ↓

大沼



金澤 晋一（大沼ラムサール協議会）

おおぬま

大沼の成り立ち

北海道のラムサール条約登録湿地のうち、最も南に位置するのが大沼である。大沼は駒ヶ岳の1640年の噴火による噴出物で河川が堰き止められて形成された（堰止湖）。函館から札幌に向かう途中には、山の上部分が崩壊した駒ヶ岳の形を見ることができる。1640年にできた比較的新しい湿地であり、火山が与えた影響は至るところで目にすることができる。大沼の風景を象徴する数多くの小島群も噴火の際の噴出物の積もり重なったもので、流山という名で呼ばれる。流山のうち沼の中にあるものは島として認識しやすいが、それは陸地にもあり、初めて目にした人は古墳だと錯覚するような、こんもりとした小山である。

駒ヶ岳が噴火した際、その周辺にあったものはほとんどが焼かれたり噴出物の下になり、草木のない状態になった。その様子は駒ヶ岳登山にて山頂付近の樹木のない状態を見ると容易に感じるができる。何もない不毛の土地が、どのように現在のような森になっていくのかを観察してみるのも興味深いものである。



駒ヶ岳

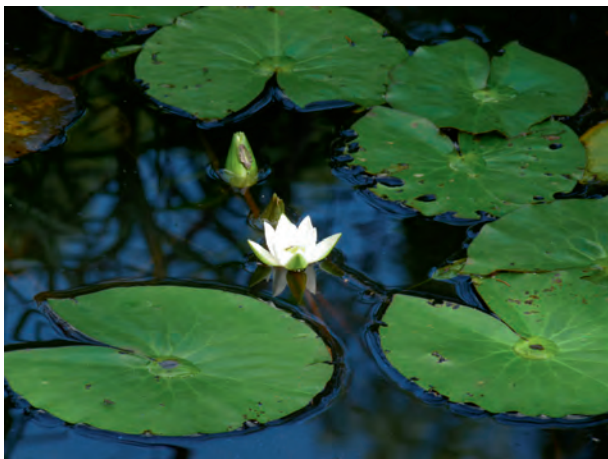
上部には樹木がないが、麓に向かうにつれて緑になっていく

大沼は1958年に国定公園に指定された。本州から函館に入る際、最初に北海道の濃厚な自然に触れる場所である。大沼を含む道南の自然環境は本州に近いが、津軽海峡が動物相の分布境界線（ブラキストンライン）となっており、本州とは似て非なる動物が生息している。

大沼は冬季間全面結氷するため、水鳥の越冬地にはあまり適さないが、海を越えて本州と行き来する鳥たちにとっては貴重な休息の場である。



大沼と小沼を繋ぐ
「大沼小沼セバット」
大小の小島が流山



エゾノヒツジグサ

ブナ林の多様性

大沼は水深が浅く底が土質であるため水草の生育に適している。在来種のエゾノヒツジグサは名前のごとく律儀に未の刻に咲き始め、可憐な姿を魅せてくれる。大部分に生息している外来種のスイレンにより生息域を狭められているため、一部の小さな範囲でしかその姿を確認できないのは残念である。

森に目を向けると北海道のラムサール条約登録湿地の中で唯一ブナが自生する森である。ブナは道南では森が形成されてゆくときに最後に入り込む樹木であり、生物多様性に富む成熟した森をつくる。水源になるブナの森では年中水が枯れることなく、小川をつくり沼に注ぎ込み、降った雨は腐葉土に濾過され、湧水となる。



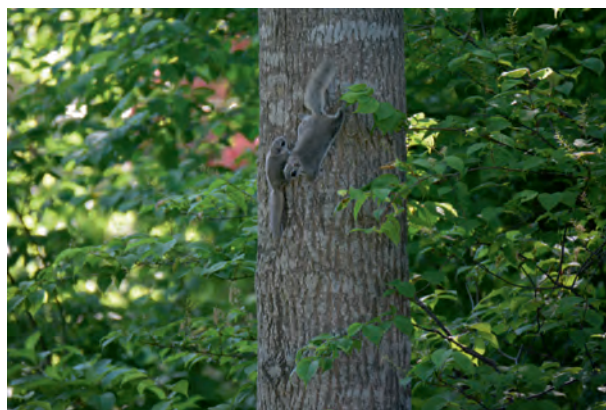
ブナの森の小道



オシドリのつがい

手前がメス、奥がオス

堰止湖の特徴で水辺ギリギリまで森が迫っている大沼の環境は、水鳥であるが樹上の洞に巣をつくるオシドリにとって繁殖に最適である。オシドリは春から初秋までゆっくりと子育てをして、9月末からは道内で繁殖をしたオシドリが集まり数百の群れになる。入り江が複雑な形で人の目に触れない場所が多くあるため、警戒心の強いオシドリにとって都合がよいようだ。オシドリの一大繁殖地となっていることは、まだ周知されていないが、オシドリに限らず生き物の邪魔にならぬよう注意を払いたいものである。森にすむ哺乳類の中ではエゾリスやエゾモモンガが数も多く目にする機会が多い。これもやはり森林環境の良さを表すものと思われる。



エゾモモンガ



高層湿原